様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０３１６
研究課題名（和文）　ヨーロッパの文学・思想継承における歪曲の系譜

研究課題名（英文）　Twists and Turns in Succession of European Literature and Thought

研究代表者
古澤　ゆう子（FURUSAWA YUKO）
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：００１７３５３４

研究成果の概要（和文）：西洋の文化・社会における古代ギリシア・ローマ以来の古典伝統継承における曲解・歪曲的受容の過程と原因を分析考察し、西洋文化の自己理解の諸相を浮き彫りにする目的に即して、詩学・美学・心理学・言語学の領域にまたがる継承過程が明確になり、近代以降の受容における曲解・歪曲の特徴考察にまで拡大することができた。さらには、懸案の日欧文学・言語比較研究において具体的事象の検討をおこない一定の成果をみた。

研究成果の概要（英文）：This project analyzes both the process of, and reasons for, twists and distortions in how Greek and Roman classical tradition was received in Western literature and society. Covering a wide range of fields like poetics, aesthetics, psychology and linguistics, a process of succession became distinct in accordance with the objective to illustrate the Western self-image. We also focus and reflect upon characteristics of twists and distortions in the reception of the classics during the modern period. Finally, we draw conclusions with regard to pending questions about specific phenomena in the field of Japanese and European comparative literature and linguistics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文科学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：ヨーロッパ、文学・文化、近代思想、伝統継承、曲解・歪曲、独語圏、古代ギリシア、言語史

１．研究開始当初の背景
研究代表者をはじめ研究分担者の大多数は、平成１７年～１９年「ＥＵにおける言語問題と言語文化」（基盤研究Ｃ）以来、一貫して西洋文化社会における事象を、時代的には古代から中世・近代・現代、地域的には独語圏を主としながら古代ギリシアとラテン系言語地域をくわえて、ひろく調査分析考察する作業を継続していたが、その過程で浮上した、伝統継承と受容における意図的曲解や歪曲またはかならずしも意図的とはいえない誤解に関する諸現象に関心をもつにいたった。西洋近現代の文学・思想が、一括してオリエントとくくられた他地域、すなわちアジア、

アフリカ、中近東などからの多くの外的異文化要素に刺激され、これを受け入れ、または反発しながら変容してきたことは明らかである。一方ヨーロッパ内的な文化の継承においても、時間的に隔たる伝統や伝承の受容と対峙に見られるさまざまな形態が、近代文化の形成に大きな影響を与えている。伝統評価にあっては過去憧憬を含む保守的維持と、進歩発展を目指すときには破壊的な改革を両極として種々の姿勢が存在するが、その評価を導き出す伝統理解のそれぞれのあり方は、これもまた時代的・地域的特性に彩られ、正確な理解への方法論的志向の一方では、誤解または歪曲がなされている。このような受容継承形態が新たな視点の獲得による文芸作品創作や思想形成に資する生産的な一面を有する一方、過去や異邦に関する正確な理解を妨げてきたことも否めない。誤解歪曲の功罪は複数の時代と地域にまたがる諸要素の勘案を通じて慎重になされねばならないが、この作業によってヨーロッパの文学・思想の側面的明確化が可能となる。従来、個々の思想家や作家が、伝統伝承または同時代の文化潮流のいかなる部分から影響を受け自己の思想や作品形成に資したかに関する研究は多く、思想・作品理解に役立っている。しかし、その理解、解釈のありかたについて、受容された対象自体との徹底的比較から、誤解歪曲等の可能性を検証する研究が十全になされているとはいいがたい。本研究にはこうした影響関係における誤解歪曲の原因と性格を考察することにより、ヨーロッパの思想的文化的系譜の特徴をより明確にする意義を持つとの考えが背景にある。

２．研究の目的

西洋の文化・社会における古代から現代にいたる伝統継承過程の紆余曲折に見られる誤解・歪曲の事例をとりあげて分析し、その原因と特徴を考察する。

（１）古代・中世・近代への時代的移行をめぐる西洋文化の自己理解の諸相を浮き彫りにする。伝統の誤解や歪曲は前時代への反発反動であり、次の時代を形成する重要な要素となるが、特徴的な保守への反抗およびそれとは逆の古いものへの憧憬を分析検討する。まずは古典継承の重要な核となったルネサンスにおける古代ギリシア文化思想にする批判的評価を検討する。１４世紀、前時代に対する過激な反動からスコラ哲学とともに中世の芸術と学芸が激しい批判にさらされ、同時に中世が新プラトン主義的アリストテレス主義を標榜していた反動で、イデア論をはじめとするプラトン哲学およびアリストテレス詩学に関する評価の転換がおこり、近代思想と美学に大きな影響を与えていくからである。

（２）詩学、文学論に関して、文学概念としての悲劇理解を考察する。この概念には古代・中世に対する近代の共感とともに反発と優越の傾向が見て取れるゆえ、前項（１）と密接に関連する事項である。具体的には、ヘーゲル『美学講義』、レッシングの演劇論、シラーの美学論、ゲーテの文学作品と詩論、ニーチェ『悲劇の誕生』、ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』等の悲劇論において、ギリシア悲劇やバロック悲劇が、むしろ論者自身の歴史観・芸術観のなかに組み込まれて評価される事象が数多く見られるところから検討対象とする。

（３）近代独語文学における、聖書や神話伝説の受容と展開に注目し、個々の作家作品の具体的事例に則して、その特徴を明らかにする。古代・中世の神話伝説に特別な関心をよせたドイツロマン派の作家をはじめとして、１９世紀から２０世紀への転換期に地中海・近東の発掘と考古学的民俗学的発見に刺激された時代の作品、さらに２０世紀の近代心理学、すなわちフロイトの精神分析学やユングの分析心理学に影響をうけた古代悲劇の翻案等を、ギリシア・ローマ文化のみならず、旧約聖書にみられるユダヤ教的要素の扱いを視野にいれながら考察する。

（４）哲学・思想の分野において、２０世紀以降の哲学・心理学は、古典古代や、中世の思想の遺産を幅広く利用しているが、その功罪、とくに後世の伝統理解への影響は大きく、検討される必要がある。（３）にあげたフロイトやユング、さらにはニーチェやハイデガー、アドルノなどの思考は、ギリシア・ローマの古典古代や、中世の思想の遺産を幅広く関連するが、その解釈は西洋古典学的視点からみれば大きな歪曲であるものが多く含まれるにもかかわらず彼らの思想体系のなかで大きな意義をもち、現代においては、古典解釈の定説ともいえる位置を占める場合が少なくはないからである。

（５）言語学的に言語史と比較言語の観点から、伝統継承の諸現象を分析する。ギリシアを勢力下におさめたローマがギリシア語で学んだ哲学・文芸の伝承は、中世以降もながく西洋世界においてラテン語で継承されてきたが、徐々に西洋近代諸語における表現を模索していく。この過程を１６、１７世紀の言語転換に焦点をあてながら、民族意識の問題と関連させつつ考察する。

３．研究の方法

前項「研究の目的」で述べた各項目に即して

記せば、

（１）時代的移行：主に独語圏を対象として、地域ごとに異なる受容・継承過程を確認した。特に重要な契機となる、
①西洋近代初頭のルネサンスにおける古代哲学と中世思想に対する批判的評価、
②１８世紀から１９世紀、
③１９世紀から２０世紀への世紀転換期
における文化･思想事象を分析検討した。

（２）詩学、文学論：シラー等のドイツロマン派の作家と思想家、２０世紀の文学評論家ベンヤミンの悲劇論に於ける継承を、明確化した。

（３）近代ドイツ語圏文学の素材となった聖書や中世伝説の扱い、古代ギリシア・ローマ表象などをとりあげた。伝統文化遺産の曲解と空間的に隔たる地域のイメージの変容を分析検討した。具体的にはゲーテ、ホフマンスタール、トーマス・マンの作品を対象とした。

（４）哲学･思想における伝統理解について、ヘーゲル、ニーチェ、フロイト、ハイデガー、アドルノ、ホルクハイマーの古典継承と概念理解を考察した。

（５）１８世紀ヨーロッパの、ゲルマン系とラテン系言語の言語状況と言語干渉を調・考察する。独語文学作品における体験話法の文献研究をおこなった。
具体的には、書籍等資料購入のほかに、ヨーロッパ地域の研究組織での資料収集と国際シンポジウムにおいて、主に独語圏研究者との意見交換をおこなった。さらに、国内外の研究者を招いて、シンポジウムと講演会を開催、意見交換をおこなった。

４．研究成果
（１）現代まで継続するヨーロッパの伝統継承の源泉といえる古代ギリシアの伝統継承を、叙事詩から悲劇への受容、叙事詩と悲劇からヘレニズム時代の試作品への受容を、ホメロス叙事詩、ソポクレスの悲劇作品、テオクリトスの詩歌、アリストテレス『詩学』等の文献からたどり、古代ギリシア文化自体における伝統変容の特徴を確認した。特に芸術論継承の中心をなすアリストテレス『詩学』におけるカタルシス（浄化）がいかなる性格のもので、何を浄化の対象とするかに関する多種多様な考察と論議は、今日に至るまで研究者の一致をみていない。２０１０年にドイツで出版された本格的な『詩学』注釈書のカタルシス解釈に注目し、ここにみられるアリストテレスの悲劇理解にもとづくギリシア悲劇解釈を試みた。さらにはヘレニズム時代の牧歌を分析して、古代における叙事詩の伝統継承の特徴をさぐった。（古澤論文「ルネサンスの古典理解」「カタルシス再考」参照。ならびに「牧人の歌合戦」２０１１年雑誌『研』６４号所収。）

（２）独語圏哲学思想における古代悲劇概念の受容と変容過程を、ヘーゲル、シェリング、ヨルク伯等のドイツ観念論のギリシア悲劇理解とカタルシス解釈、さらに２０世紀におけるハイデガーとフランス思想界のレヴィナス、ブランショの実存的悲劇的根拠に関して考察した。（平成２３年８月シンポジウム「実存の悲劇的根拠」開催。講師は森田團（西南学院大学）西山達也（東京大学）三重野清顕（東京大学）の三氏。）

（３）近代独語文学における聖書、神話伝説受容の典型的事例として、ギリシア悲劇を翻案したホフマンスタール作品をとりあげ分析考察の結果を発表した。ソポクレス悲劇の翻案でありながら、１９世紀末から２０世紀初頭にかけてのフロイト心理学ならびにあたらしくおこった考古学的民俗学の思想をとりいれて顕著な近代的特徴をみせる背景を分析した。（古澤論文「世紀転換期の古代女人像」（２０１１年）参照。）

（４）２０世紀の独語思想界における古典継承の展開をアドルノ、ホルクハイマーに即して考察した結果を、著書、翻訳書と解説、論文において発表した。（藤野著書『』藤野共訳書『ゾチオロギカ』アドルノ／ホルクハイマー』参照。）また、ギリシア古典の曲解的受容者ニーチェがさらに曲解的に受容される事例を講演会と討論において論功した。（平成２３年１１月講演会「『力への意志』 - エリーザベート･ニーチェの場合」須藤訓任氏（大阪大学）による開催。）

（５）言語学と比較文化の観点から、ラテン系言語圏と中世独語圏の継承関係考察をおこない、研究実績を発表（清水論文「Thomasin von Zirklaere ″Der Waelsche Gast″（イタリアの客人）についての一考察 - 中世の「イタリア人」が何故「ドイツ語」で詩作をしたのか - 」参照。）、万葉集と古代ギリシア詩歌の比較に関して国際シンポジウムで発表（古澤研究発表 Darstellungen der innerseelischen Vorgängen durch Naturbeschreibungen bei Sappho und „Manyoshu“参照。）、日独体験話法の文献研究において、日本の言語文化との関連を国際シンポジウムで発表した（三瓶学会発表）。この研究本発表における主な関心は、認知と言語表現の連関を解明することで、人間の視覚

的認知の根幹をなす「視点」に注目し、 話者の「心的視点」が「対象」 に「近く」，対象をいわば「直接的に知覚」できることを基軸とする原理を提唱し，その原理が，多様な言語表現の「機能」、ならびにその機能が生じる「仕組み」を統一的に説明する原理的基盤となりうることを例証するものである。

（６）美学芸術関係について、モーツアルトとリヒアルト・シュトラウスの音楽的伝統継承、さらには社会批判をこととするカバレットの意図的歪曲に関連する緒論（田辺論文「モーツアルトの父子関係と『ドンジョ・ヴァンニ』」(新国立劇場プログラム冊子２０１２年)、「ザルツブルク音楽祭　リヒアルト・シュトラウス『影のない女』」日本リヒアルト・シュトラウス協会会報２０１１年)、「カバレット・ソングとナチズム」『小平グーテンタークの会』２０１１年)）と政治の耽美主義化についての考察（久保書評「政治の耽美主義化に対抗しうるか　ヘルベルト・ハフナー著『巨匠フルトヴェングラーの生涯』」『ＨＱ』第３０号２０１１年）があげられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１５件）
①三瓶裕文、体験話法の機能について ― 二重の視点性の観点から―、『エネルゲイア』第 37 号（ドイツ文法理論研究会紀要）、査読なし、2012、1-16

②清水朗、Thomasin von Zirklaere ″Der Waelsche Gast″ （イタリアの客人）についての一考察--中世の「イタリア人」が何故「ドイツ語」で詩作をしたのかー、一橋大学紀要『言語文化』48 巻、査読なし、2011、3-14

③藤野寛、倫理学の問題としての原発、一橋大学紀要『言語社会』第 6 号、査読なし、2011、118-130

④清水朗、Der sprachliche Wandel vom 16. Zum 17.Jahrhundert in Westeuropa und die Entstehung der Staatssprache 、Hitotsubashi-Journal of Arts and Sciences, Vol.51 No.1、査読なし、2011、47-51

⑤古澤ゆう子、ルネサンスの古典理解から、ペディラヴィウム　ヘブライズムとヘレニズム研究 61 号、査読あり、2009、10-19

⑥古澤ゆう子、アリストテレス『詩学』カタルシス再考、一橋大学紀要『言語文化』46 巻、査読なし、2009、95-107

〔学会発表〕（計１０件）
①古澤ゆう子、日独修好１５０年記念立教国際コロキウム、Darstellungen der innerseelischen Vorgängen durch Naturbeschreibungen bei Sappho und „Manyoshu“、2011 年 9 月 19 日、立教大学

②三瓶裕文、第 12 回国際ドイツ語学・文学学会ワルシャワ大会（招待講演）、Erlebte Rede als miterlebende Wiedergabe des Inneren einer Romanfigur、2010 年 8 月 2 日、ワルシャワ大学

③古澤ゆう子、日本ヘルダー学会、西洋古典のドイツ語翻訳における曲解と歪曲、2010 年 6 月 20 日、立教大学

〔図書〕（計６件）
①古澤ゆう子、他、彩流社、ジェンダー表象の政治学、2011、302（59-87）

②尾方一郎、他、早稲田大学出版部、演劇インタラクティヴ 日本×ドイツ、2010、352（41-67）

③藤野寛、他、岩波書店、自由への問い ８ 生－生存・生き方・生命、2010、252（56-84）

６．研究組織
(1)研究代表者
古澤　ゆう子（FURUSAWA YUKO）
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：００１７３５３４

(2)研究分担者
田辺　秀樹（TANABE HIDEKI）
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：８００１２５３２

藤野　寛（FUJINO HIROSHI）
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：５０２９５４４０

久保　哲司（KUBO TETSUJI）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：９０１７００２６

三瓶　裕文（MIKAME HIROFUMI）
一橋大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号：４０１２７４０２
（H21：連携研究者）

清水　朗（SHIMIZU AKIRA）
一橋大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号：３０２３５６４２

尾方　一郎（OGATA ICHIRO）
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：８０２４２０８０

武村　知子（TAKEMURA TOMOKO）
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：６０３２３８９６

ラルフ・デーゲン（RALPH DEGEN）
一橋大学・大学教育研究開発センター・特任教授
研究者番号：２０３８７５９１

(3)連携研究者
戸田　聡（TODA SATOSHI）
一橋大学・大学院経済学研究科・特任講師
研究者番号：２０５７５９０６
（H22：連携研究者）